



雲青き

さいたま市立大成中学校 学校だより

5月号 令和7年5月2日

大成文学散歩

校長 福田博志

文豪と呼ばれる人たちと、大成中学校近辺のことが書かれた興味深い文献がありましたので紹介します。

昭和23年(1948年)4月29日、太宰治(だざいおさむ)は、筑摩書房社長の古田晁(ふるたあきら)さんと神田駅で待ち合わせて、大宮へ来た。天ぷら屋「やなぎ小路(現在のすずらん通り)天清」の御主人、小野沢清澄氏の自宅がある大門町3丁目103番地、その二階の八畳と三畳の二部屋を借り、5月12日まで滞在した。

不朽の名作「人間失格」は、3月7日から熱海市咲見町に滞在して「第二の手記」まで書き、4月に三鷹市の仕事部屋で書き継ぎ、「第三の手記」後半52枚と「あとがき」を大宮の小野沢方で完成させた。

午前9時ごろに起床し、正午頃から午後3時頃まで、三畳間の大きな黒い机で原稿を5枚ほど書き、夜はゆっくり食事をして、時々ウイスキーを飲み、就寝。一日中ほとんど部屋に籠ったままで、時折、氷川神社参道の銭湯「松ノ湯」(後の蓮見病院付近)に出かけ、参道の闇市(後の平成広場)をのぞく。あとは、宇治病院へ行くくらい。診察にあたった宇治達郎院長は、胃カメラの発明者で、吉村昭の小説「光る壁画」のモデル。

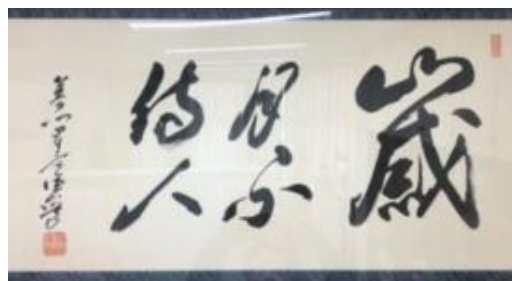
「第三の手記」後半にこんな表現がある。「…、神社の杉木立で白衣の御神体に逢った時に感ずるかもしれないような、四の五の言わさぬ古代の荒々しい恐怖感でした。」参道を散歩しながら構想を練ったのだろうか。

太宰治は井伏鱒二(いぶせますじ)夫妻の媒酌で結婚式を挙げている。葬儀副委員長も井伏鱒二だった。井伏鱒二は、短編小説「普門院さん」を書いている。この小説のモデルとなったのが、大成山普門院元住職の阿部道山和尚だ。

校長室に阿部道山和尚の書があります。「歲月不待人」

(歲月人を待たず)

風薫る、さわやかな新緑の季節を楽しんでみてはいかがでしょうか。



【参考文献】

- 朝日新聞さいたま総局編「さいたま文学紀行 作家たちの描いた風景」さきたま出版会
- 太宰治著「人間失格・桜桃」角川書店
- 関田史郎著「文学で歩く ふるさと」さきたま出版会
- 小林俊雄著「子どもたちと一緒にいるだけで」関東図書株式会社